

大学生における同一性の感覚と推論の誤り、抑うつ気分の関係

山川樹¹・織田正美²・坂本真士³

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 東京福祉大学大学院・³ 日本大学文理学部)

1. 目的

●思春期及び青年前期は、高齢期を除くと最も抑うつの危険性が高い年代(厚生労働省, 2002; 坂本・大野, 2005)であり、同一性の確立が求められる年代でもある(Erikson, 1963; 山内, 2001)

●同一性の確立の失敗は、種々の精神的不適応の発生に影響を与える要因であることが示唆されている(金, 2002)

●抑うつ者の認知は、自己に関連した領域で歪んでいる(丹野, 2001)。

→人は、既知の情報を基に推論を行うが、基準情報の誤りは、それに基づく推論の誤りを導くだろう。

→抑うつ的な人は、基準となる自己の情報(同一性)が不確かだから、自己に関連した領域の推論を誤るのでは？

2. 仮説

①同一性が確立されているほど、抑うつ気分になりにくい

②同一性が確立されていないと、推論の誤りを経ることでネガティブ情動を引き起こす

3. 方法

●調査協力者 30歳未満の大学生202名(男性96名, 女性106名, 平均年齢20.5歳, SD1.5)

●調査方法 無記名自己記入式質問紙調査

●質問紙内容 ①多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS; 谷, 2001) ②推論の誤り尺度(Thinking Error Scale; TES; 丹野他, 1998) ③自己評価式抑うつ性尺度(Self-rating Depression Scale; SDS; Zung, 1965; 福田・小林, 1973) ④状態-特性不安検査(State-Trait Anxiety Inventory; STAI; Spielberger; 1966; 中里・水口, 1982)※分析にはA-Trait得点のみ使用。⑤フェイスシート。

●分析方法

✓仮説1: MEIS得点の上下位約1/3(すなわち各67人ずつ)における SDS得点差の検定(*t*検定)

✓仮説2: MEISの下位尺度, TESが想定している6種類の推論の誤り, SDS, STAI-traitの得点をそれぞれ観測変数として扱い, 潜在変数をそれぞれ「同一性の感覚」「推論の誤り」「ネガティブ情動」とした共分散構造分析

4. 結果・考察

●仮説1 低MEIS得点群では高MEIS得点群に比べ、SDS得点が有意に高かった(Table.1)

●仮説2 決定係数(R^2)は「推論の誤り」に.49, 「ネガティブ情動」に.85であった。各潜在変数から観測変数へのパス係数は.47~.92で、いずれも統計的に高度に有意であった($p < .000$)。同一性の感覚からネガティブ情動へのパス係数は-.62, 推論の誤りへのパス係数は-.70, 推論の誤りからネガティブ情動へのパス係数は.37となり、いずれも統計的に有意であった($p < .000$)。(Figure.1; Figure.1では誤差及び残差の表記は省略してある)

➢ 同一性の感覚が確かな大学生の抑うつ性は乏しいが、同一性の感覚が不確かな学生は軽度から中等度の抑うつ性があることが示された。

➢ 同一性の感覚の不確かさは、ネガティブ情動に直接影響を与える一方、推論の誤り易さにも影響を与えることが示唆された。

Table.1 高MEIS得点群と低MEIS得点群のSDS得点の平均値

群	N	平均値	標準偏差	F値	t値(df)
高MEIS得点群	67	35.84	7.12	0.08	10.68***
低MEIS得点群	67	48.81	6.94		(132)

*** $p < .000$

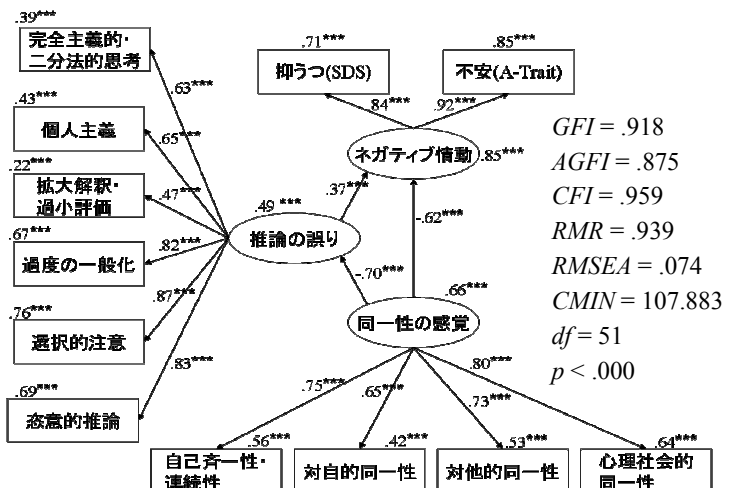


Figure.1 ネガティブ情動の要因と考えられる推論の誤りと同一性の因果モデルの検討 *** $p < .000$